

## 税による恩恵と少子高齢化

柏市立風早中学校 第三学年 高橋 弦己

私たちは、日常生活のさまざまな場面で税に助けられている。例えば小中学生は教育費の無償化、高齢者は安定した生活を送るための保障などにより、掛かる費用を抑えることができる。しかし、「税金」という言葉は嫌なイメージを持たれているように思う。

普段、買い物をするときには「消費税」を払わなければならない。お小遣いでゲームを買うときに「税金がなかったらもっと安く買ったのに」とどうしても感じてしまう。

しかし、学校の授業で税金について学び、その仕組みについて深く考えるようになった。もし、税金を集めることがなかったら、どうなってしまうのだろう。想像してみた。

中学生は一人あたり学校に通うために一年間でおよそ百万円もかかると学んだが、自分のお小遣いや我が家の家計から税金を払わなかったとしても、その金額は支出できないだろう。警察・消防・救急も税金によってまかなわれていると知ったが、大勢の働く人や企業から税を集めることで成り立っているのだ。税がなかったら犯罪が多くなり、苦しい生活を送る人、お金が少なくて病院に行けないという人が大量に増えてしまうのではないだろうか。

また、いまの日本は「少子高齢化」という大きな問題に直面している。働く世代が少ないと、税の負担がその世代に重くのしかかってしまう。いまのままで、「少子高齢化」が進んで行った場合、約四〇年後には一九歳以下の人口が約八〇〇万人も減ってしまうというデータがある。二〇〇〇年には、六五歳以上の一人一人を、働く世代が三・六人で支えていた。しかし、二〇二五年になると、一・八人の働く世代で支えなければならなくなっている。この先は、もっと少ない人数で支えなければならなくなるだろう。これから少しでも「少子高齢化」の勢いに歯止めをかけるにはどのようなすれば良いか。

子どもが多い社会にするためには、住宅地の近くに子どもが遊びやすい公園や小さな子を預けることができる施設を作るなど、他にも様々な改善策を考える必要がある。子どもが育てやすい環境になれば、将来的に働く世代が増えるだろう。

そのように、自分が思うような良い社会をつくるためには、選挙で思いを託せる人に投票することが大切だとも学んだ。十八歳になったら欠かさず選挙に参加し、自分の思いを社会に反映させていきたい。